



1873年(明治6年)創刊

夕刊

発行所

信濃毎日新聞社
長野本社 〒380-8546
長野市南東町 657番地
電話(026)
受付 236-3000 編集 236-3111
販売 236-3310 広告 236-3333
松本本社 〒399-8711
松本市宮田 2番10号
電話(0263) 編集 25-2151
販売・広告・事業 25-2153
©信濃毎日新聞社 2010年

アイルランド政府公認ガイド 山下直子さん 上田市出身

やました なおこ

美しい自然にあふれた西欧の島国アイルランド。その魅力に引き込まれて移り住んで10年になる。アイルランド政府観光庁公認の観光ガイドとして日本人旅行者を案内し、北海道とほぼ同じ大きさの国土を駆け回る。
「自然がきれい。時間の流れもゆったりした国で、のんびりできる。乗馬やカヤック、釣りなどもお勧め」。冬の閑散期、年末年始を故郷の上田市で過ごすため一時帰国し、アイルランド観光の魅力を語った。
上田で育った子どものころから外国の文学作品に親しみ、文章を書くのも好きだった。外国に行つて物語

を書いて暮らしたいと、漠然と夢を描いていた。38歳。「今やっていることがその夢に近づいていて、不思議な思いがありますね」。
上田高校を卒業後、早稲田大学第一文学部へ。周囲の学生が就職先を決めていく中で、自身は目標とする職業が定まらず、姉に勧められて都内の旅行会社に入った。

学ばせてもらった」。添乗員として60カ国以上を巡つたが、中でもアイルランドの印象は強かった。まだ旅行先として認知度が

や宗教の成り立ちなどヨーロッパ共通の知識が生かせない部分も多く、難しい旅行地でした。また牧歌的で道路も悪く、秘境っぽかった。その国をわざわざ選ぶ人とのツアーは楽しみで、現地のガイドとの出会いも楽しく、気に入っていきま

すぐに添乗員として海外に出る機会があったが、スパルタ教育の厳しい会社で、最初のころは終電まで帰れず土曜日も出社。外国に行けるという甘い気持ちが入ったので、旅行業に夢があるわけでもなかった。会社員生活は9カ月で自ら終わらせた。

そんなころ、現地の私立学校で英語教員の募集があると知人から聞いた。住んでみたいという一心で応募し、2000年、首都ダブリンに移り住んだ。教員は1年で辞め、日本からのアイルランドツアーが増え始めた時流にも乗って観光ガイド業を本格化。02年冬から03年春にかけて同国政府観光庁公認ガイドの養成講座を受講、資格を取得した。

だが、その旅行会社から日当制の専属ツアーコンダクターとして誘われ、添乗員業務は続けることに。会社員時代を含め6年間の添乗員経験を積み、「次第にいい評価が得られるようになり、サービス業の基礎を

観光ガイドの傍ら、ビジネス訪問者の通訳などに加え、国内を巡って得た知識を生かし、日本から来る雑誌やテレビ取材を仲介する仕事も多い。そんな縁から雑誌にアイルランド紹介の文章を書く機会も増えた。外国で書いて暮らす夢が形になってきた。

「アイルランドの人は人種や年齢、性別で垣根をつくらず親しみやすく、相手のプライバシーに踏み込むことはすばつと言わない。日本にいたころのように、たくさんの情報にのみ込まれる感覚もない。なんとなくくつろげる国ですね」。仕事の縁が続く限りアイルランドで暮らすつもりだ。

美しい島で夢を形に

低かった当地へ、1997年に初めて旅行客を連れて行つて以降、何度も添乗を任された。
「アイルランドには歴史



「国が小さいためか、アイルランドの人々は外への関心が高く、日本のこともよく知っていて親日的です」 東京都新宿区のアイルランド政府観光庁日本事務所

新 ひと したのり 212

低かった当地へ、1997年に初めて旅行客を連れて行つて以降、何度も添乗を任された。
「アイルランドには歴史